



TITLE:

『シジフの神話』について：
<<Dénuelement のテーマを中心にし
て>>

AUTHOR(S):

今村, 亨

CITATION:

今村, 亨. 『シジフの神話』について : <<Dénuelement のテーマを中心に
して>>. 仏文研究 1988, 19: 121-137

ISSUE DATE:

1988-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137737>

RIGHT:

『シジフの神話』について

——《Dénuelement》のテーマを中心に——

今 村 亨

はじめに

この研究¹⁾は、《dénuelement》というテーマを通して、カミュの初期のエッセーを讀解しようという試みであるが、最終的には『シジフの神話』における《幸福》と、このテーマとを結び付けることによって、『シジフの神話』が持つ性格自体を明らかにすることを目的とする。

第一章

まず《dénuelement》というテーマが、どのようなテーマであるのかが問題となろう。《dénuelement》とは、無一物の状態を表す言葉であり《nudité》などの『裸の状態』を表す単語と同じ語源を持つ言葉である。したがって《dénuelement》という言葉は、それ自体、非常に肉体的なコノテーションを持ったものである。だが、この言葉は同時に、精神的な状態を表す表現にも使われており、*Littré*においても《Terme de la vie spirituelle. Le dénûment des biens sensibles, disposition contraire au goût et à l'attachement naturel qu'on a pour les objets des sens》という用例が掲載されている。事実、カミュの作品中においては、このテーマは、肉体的・精神的な形で、あるいは、意識的・無意識的な形でというように、非常に多様なレベルであらわれている。しかしながらカミュにおいては、この語は、ほとんどいつも同じ意味で、すなわち幻想の剥奪、あるいは拒否という意味に収束する。ただし、カミュの場合における《幻想》とは常識的な意味ではないことは、十分に考慮されねばならないであろう。彼にとっては《幻想》とは、常識的には我々の現実そのものとされる、日常的生を意味することが多いのである。次の *L'Envers et l'Endroit* の一節は、彼にとっての《幻想》の有様を如実に示している。

Le monde s'était dissous et avec lui l'illusion que la vie recommence tous les jours. Rien n'existait plus, études ou ambitions, préférences au restaurant ou couleurs favorites.

Rien que la maladie et la mort où il se sentait plongé...²⁾

では、このような《幻想》を持たない人間の生とはどのようなものであろうか。カミュは直接的に答えているわけではないが、非常に特徴的な仕方では、この問いへの関心を表している。それは、《老い》に対する並々ならぬ関心という形で表れているといえよう。なぜなら、《老い》とは、カミュにとって、来たるべき死によって、否応なく自らの生の持つ日常性、明日もまた同じような毎日が繰り返されるはずであるといった、我々の無意識的な前提自体を、根本的に問題とするものであるからである。実際、彼の初期作品には、様々な形で、老人たちが登場する。特に、彼の実質的な処女作である *l'Envers et l'Endroit* が、三人の老人たちをそれぞれ中心とした三つのエピソードによる《L'ironie》で始まっていることは象徴的である。これらのエピソードのうち、《dénuement》のテーマという観点からみて、最も興味深いとおもわれるのは、二番目の、若者たちからはや話を聞いてもらえなくなった老人の話である。次の一節は、カミュの『裸の状態』への執着を見事に表しているということができよう。

Maintenant, les rues étaient plus noires et moins peuplées. Des voix passaient encore. Dans l'étrange apaisement du soir, elles devenaient plus solennelles. Derrière les collines qui encerclaient la ville, il y avait encore des lueurs de jour. Une fumée, imposante, on ne sais d'où venue, apparut derrière les crêtes boisées. Lente, elle s'éleva et s'éteignait comme un sapin. Le vieux ferma les yeux. Devant la vie qui emportait les grondements de la ville et le sourire indifférent du ciel, il était seul, désespéré, *nu, mort déjà*.³⁾

たとえフィクションであるとしても、このような死の場面で裸であるということは、かなり奇妙な状況ではないだろうか？ しかしカミュにとっては、この老人が自らの死に際して裸であることは、むしろ当然に近いことだったのである。なぜなら、この老人はすでに彼にとってのあらゆる確実性を奪われているからである。

Il fut bientôt seul, malgré ses efforts et ses mensonges pour rendre son récit plus attrayant. Sans égards les jeunes étaient partis. De nouveau seul. N'être plus écouté : c'est cela qui est terrible lorsqu'on est vieux. On le condamnait au silence et à la solitude. On lui signifiait qu'il allait bientôt mourir.⁴⁾

この老人は、人間たちから追放されているという意味において、《裸》なのである。ここに、肉体的な表現によって表された実存的状況が、提示されていることが認められよう。なぜならこの老

人は、まさに死に直面した人間の状態を表象しているといえるからである。そのうえ、カミュは、この老人の死に、一種の儀式的な雰囲気を与えずにはいられない。《l'étrange apaisement du soir》、《Des voix... plus solennelles》ないしは、《Une fumée imposante, on ne sais d'où venue》などの表現は、この老人の死を一種に《幸福な死》としているといえるだろう。しかしながら、この《幸福な死》は、老人にとっては、無意識的なもの、あるいは、《古い》により強いられたものである。そのうえ、この老人は、それを感じることはできない。すでに死んでしまっている彼には、それは無関係でしかないのである。この老人のような場合を、無意識的な、あるいは、強いられた《dénuelement》ということができよう。彼の死の場面がまさに《ironique》であるのは、自分の達成した《幸福な死》を知ることなく、孤独のただなかで死んでいくからである。しかしもし意識的な《dénuelement》が可能ならば、《幸福な死》そのものが可能ではなかろうか。すでにこの点に、カミュがその後たどる道筋が暗示されているということができよう。すなわち、この老人の運命のもつ皮肉さを、意識的な《dénuelement》を達成することによって、解消することである。かくして、彼は《幸福な死》自体を達成しようとするのである⁵⁾。この試みは、*Noces*において、より明確な姿を現わしている。それは、死の確実性から目を背けさせるようなあらゆる慰めを拒否することにほかならない。

Peu de gens comprennent qu'il y a un refus qui n'a rien de commun avec le renoncement. Que signifient ici les mots d'avenir, de mieux-être, de situation? Que signifie le progres du cœur? Si je refuse obstinément tous les 《plus tard》 du monde, c'est qu'il s'agit aussi bien de ne pas renoncer à ma richesse présente.⁶⁾

カミュは、ここで死自体を拒否しているわけではない。未来を当てにするような考え方を拒否しているのである。なぜなら彼にとっては、死は疑いようなない真実だからである。

Ce qui m'étonne toujours, alors que nous sommes si prompts à raffiner sur d'autres sujets, c'est la pauvreté de nos idées sur la mort. [...] Mais cela prouve aussi que tout ce qui est simple nous dépasse. Qu'est-ce que le bleu et que penser du bleu? C'est la même difficulté pour la mort. De la mort et des couleurs, nous ne savons pas discuter.⁷⁾

このような死の絶対的な事実性ゆえに、カミュにとって、《彼岸》や《将来》に関することは幻想に過ぎないものとなる。それゆえ、カミュは、未来や永遠に頼ろうとする考え方を批判するのである。そして、その批判は、病気に対しても向けられる。

[...] Djémila, inhumain dans la chute du soleil, devant cette mort de l'espoir et des couleurs. J'étais sûr qu'arrivés à la fin d'une vie, les hommes dignes de ce nom doivent retrouver ce tête-à-tête, renier les quelques idées qui furent les leurs et recouvrer l'innocence et la vérité qui luisent dans le regard des hommes antiques en face de leur destin. Ils regagnent leur jeunesse, mais en étreignant la mort. Rien de plus méprisable à cet égard que la maladie. Elle y prépare. Elle crée un apprentissage dont le premier stade est l'attendrissement sur soi-même. Elle appuie dans son grand effort qui est de se dérober à la cettitude de mourir entier.⁸⁾

彼岸や将来を当てにすることが、死の確実性をまともに考慮しないという意味において、偽瞞であるとするならば、病氣は、死を飼い慣らしてしまうという点で、カミュにとっては、やはり一種の慰めでしかないのである。

以上のことからみて、意識的な《dénueement》とは、死を全的に受け入れること、そしてそうするために、あらゆる慰めや、幻想を拒否することであるといえよう。そして、この意識的な《dénueement》は、死に対する差向かい、《tête-à-tête》をもたらすのである。カミュは、この《差向かい》を人間の真正の条件と見なしているように思われる。このような《差向かい》は、*Noces*の中で、様々な様相のもとで語られている。

Pour moi, devant ce monde, je ne veux pas mentir ni qu'on me mente. Je veux porter ma lucidité jusqu'au bout et regarder ma fin avec toute la profusion de ma jalousie et de mon horreur. C'est dans la mesure où je me sépare du monde que j'ai peur de la mort, dans la mesure où je m'attache au sort des hommes qui vivent, au lieu de contempler le ciel qui dure. Créer des morts conscientes, c'est diminuer la distance qui nous sépare du monde, et entrer sans joie dans l'accomplissement, conscient des images exaltantes d'un monde à jamais perdu.⁹⁾

意識的な《dénueement》は、このように、最終的には死の意識的な受容へとつながる。しかしながらそれは、《Je veux porter ma lucidité jusqu'au bout》という言葉が示している通り、決して諦めを意味してはいない。こうした形で死を受容しようとすることは、カミュにとっては、常にある精神状態の発見と同時的であり、それは、ほとんどいつも《topographique》な言葉で語られているのである。その最も注目すべき例としては、《砂漠》の発見を挙げることができよう。

Devant ces paysages dont la grandeur serre la gorge, chacune de ses pensée est une rature

sur l'homme. [...] Des paysages si purs sont desséchant pour l'âme et leur beauté insupportable. Dans ces évangiles de pierres, de ciel, et d'eau, il est dit que rien ne ressuscite. *Désormais au fond de ce désert magnifique au coeur*, la tentation commence pour les hommes de ce pays.¹⁰⁾

この《砂漠》の発見は、意識的な《dénuelement》の極限に位置しており、また、カミュにとっての《幸福》の源泉とさえいえるのである。

C'est sur ce balancement qu'il faudrait s'arrêter : singulier instant où la spiritualité répudie la morale, où *le bonheur naît de l'absence d'espoir*, où l'esprit trouve sa raison dans le corps.¹¹⁾

このような瞬間の存在、あるいは希望の不在から生れる《幸福》は、『シジフの神話』の最終章におけるシジフの幸福との関連性を示唆するのに充分である。これらのことからみて、『シジフの神話』においても、《dénuelement》のテーマの検討をさらに推し進めることができるだろう。

第二章

『シジフの神話』は、形式的な面からみると、哲学的エッセーであり、文学的エッセーである *Noces* とはあまり類縁性を見出すことは出来ない。しかしながら、第一章の最後の部分にみたように、テーマの点では、幸福の問題などのように、両者のつながりを感じさせるものがある。我々は、これらの共通のテーマを、《dénuelement》のテーマと結び付けることによって、『シジフの神話』のもつ個人的真実の実現という一側面を明らかにするつもりである。

そのためには、まず、『シジフの神話』におけるカミュの不条理についての論証をたどらねばならない。

カミュは『シジフの神話』を自殺の問題から始めている。それだけでも、『シジフの神話』と *Noces* との類縁性を感じることができよう。なぜなら、自殺は一種の《意識的な死》他ならないからである¹²⁾。だが、『シジフの神話』の中心的な主題は、不条理である。各章のタイトルがそれを示している¹³⁾。では、不条理性とはなんだろうか。カミュによる最初の定義は次のようである。

Un monde qu'on peut expliquer même avec de mauvaises raisons est un monde familier. Mais au contraire, dans *un univers soudain privé d'illusions et de lumières*, l'homme se

sent un étranger. Cet exil est sans recours, puisqu'il est *privé des souvenirs d'une patrie perdue ou de l'espoir d'une terre promise*. Ce divorce entre l'homme et sa vie, l'acteur et son décor, c'est proprement le sentiment de l'absurdité.¹⁴⁾

不条理が何物かを剥奪された状態として定義されていることは、下線部が示すとおりである。つまり不条理とは、世界からの断絶の感情とされているわけである。この定義からみて、不条理の感情を、強いられた《dénuelement》とみなすことは可能であろう。しかし、カミュはすぐに、《希望》を批判することを通して、意識的な《dénuelement》に移行する。彼は《希望》を偽瞞とするのである。

L'esquive mortelle qui fait le troisième thème de cet essai, c'est l'espoir. Espoir d'une autre vie qu'il faut *《mériter》*, ou tricherie de ceux qui vivent non pour la vie elle-même, mais pour quelque grande idée qui la dépasse, la sublime, lui donne un sens et la trahit.¹⁵⁾

ここでカミュのいう《希望》とは、結局、*Noces*などで、かれが語っていた《幻想》と同様なものであるということができよう。そして、このような《希望》を拒絶することこそが、不条理な人間の条件となるのである。これは、まさに意識的な《dénuelement》であるといってよからう。このような強いられた《dénuelement》から、意識的な《dénuelement》への移行は、『シジフの神話』全体の大きな動きであるといってよい。

カミュは、《不条理な論証》を貫く態度を《d'être logique jusqu'au bout》とし、この極限を《lieux déserts et sans eau》¹⁶⁾と呼んで、綿密に調べることが問題であるとする。そして、彼は、不条理の感情の記述に専念するのである。彼は、不条理の感情の起源を見出すことから始める。

Il arrive que les décors s'écoulent. Lever, tramway, quatre heures de bureau ou d'usine, repas, tramway, quatre heures de travail, repas, sommeil et lundi mardi mercredi jeudi vendredi, et samedi sur le même rythme, cette route se suit aisément la plupart du temps. Un jour seulement, le pourquoi s'élève et tout commence dans cette lassitude teintée d'étonnement. *《Commence》*, ceci est important.¹⁶⁾

不条理の感情の起源は、このように、日常的な習慣の取るに足りない性格を意識することにある。また、同じく未来に対する肉体的な拒否という経験からも由来している。カミュにとっては、未来は、常に幻想でしかないのである。

Nous vivons sur l'avenir : 《demain》, 《plus tard》, 《quand tu auras une situation》, 《avec l'âge tu comprendras》. Ces inconséquences sont admirables, car enfin il s'agit de mourir. [...] Demain, il souhaitait demain, quand tout lui-même aurait dû s'y refuser. Cette révolte de la chair, c'est l'absurde.¹⁷⁾

カミュは、以上のほかに、不条理の感情の起源として、外界のもつ《分厚さ》に気づくことや、人間自身の《非人間性》に気づくことを挙げているが、そのいずれもが、日常性に覆われていたある世界を発見することを意味している。そして、彼は最後に死のテーマにたどりつく。死の確実さは、やはり不条理の感情をもたらすのである。

L'horeur vient en réalité du côté mathématique de l'évènement. Si le temps nous effraie, c'est qu'il fait la démonstration, la solution vient derrière. Tous les beaux discours sur l'âme vont recevoir ici, au moins pour un temps, une preuve par neuf de leur contraire.¹⁸⁾

ここで、カミュの不死性に対する、というよりも、《tous les beaux discours sur l'âme》に対する拒否をふたたび確認することができよう。

これらすべての例に共通しているのは、実際、《幻想》の剥奪である。従って、カミュは、これらの例を通して、強いられた《dénuelement》の様々な様相を描いているということができよう。しかし彼は、このあと、強いられた《dénuelement》の描写から、意識的な《dénuelement》へと移行していくのである。そのような移行は、彼が、精神の最初の働きを定義した一節にすでに現われている。

Le premiere démarche de l'esprit est de distinguer ce qui est vrai de ce qui est faux.¹⁹⁾

この定義の《distinguer ce qui est vrai de ce qui est faux》の《vrai》を《réel》に置き換え、《faux》を《illusiore》に置き換えてみると、この定義自体を、意識的な《dénuelement》の現われであるように思われる。が、カミュは、精神のこの働き自体の有効性をも、いったんは否定する。究極的にまで、この働きを貫くことは不可能だとするのである²⁰⁾。しかしながら、カミュは、ここで、精神についての独特な定義を導入するのである。すなわち、精神は、論理の為の道具であるだけでなく、世界を《一体化》しようとする願望なのである。

Quels que soient les jeux de mots et les acrobaties de la logique, comprendre c'est avant

tout unifier. Le désir profond de l'esprit même dans ces démarches les plus évoluées rejoint le sentiment inconscient de l'homme devant son univers : il est exigence de familiarité, appétit de clarté.²¹⁾

精神は、このようにカミュにとっては、一体性に対する郷愁でしかない。そのうえこの郷愁は、決して満たされることはないものである。が、カミュの理性批判は、絶対的なものではない。なぜなら、人間は、《ce moi et ce monde》が、現象界に属しているかぎり、感じることはできるからである。ただ、それらを要約し、定義しようとすることはできないのである。したがって、人間にとって可能な態度は、結局、それらの描写に留まることである。しかし、カミュは、描写することでは満足できないと主張する。

Je puis dessiner un à un tous les visages qu'il [ce moi] sait prendre, tous ceux aussi qu'on lui a donnés, cette éducation, cette origine, cette ardeur ou ces silences, cette grandeur ou cette bassesse. Mais on n'additionne pas des visages. Ce cœur même qui est le mien me restera à jamais indéfinissable. Entre la certitude que j'ai de mon existence et le contenu que j'essaie de donner à cette assurance, le fossé ne sera jamais comblé. Pour toujours, je serai étranger à moi-même.²²⁾

この部分と *Noces* 中の人間と世界との関係について述べている一節との対比は際立っている。

Sentir ses liens avec une terre, son amour pour quelques hommes, savoir qu'il est toujours un lieu où le cœur trouvera son accord, voici déjà beaucoup de certitudes pour une seule vie d'homme.²³⁾

ここでは、世界を感じることで、確実さを見出すのには充分なのである。この違いについては、A. J. クレイトンは、肉体から精神への移行として、指摘している²⁴⁾。実際、『シジフの神話』において問題になっているのは、精神と世界との関係である。

Mais ce qui est absurde, c'est la confrontation de cet irrationnel et de ce désir éperdu de clarté dont l'appel résonne au plus profond de l'homme. L'absurde dépend autant de l'homme que du monde.²⁵⁾

カミュは、ここでまた、真と偽とを区別することにたちもどるのであるが、今度は、不条理を真とみなし、それに従うことを義務とするのである。そして、そのためにはすべてを犠牲にせねばならないと主張する。ここに、A. J. クレイトンが指摘しているように²⁶⁾、カミュによる不条理という概念自体の変質を見ることができる。つまり、最初は人間の置かれた状況を示すにすぎない概念であったのに、義務、あるいは方法上の規則に変わってしまったのである。この変化は、強いられた《dénuelement》から、意識的、あるいは意志的な《dénuelement》への変化と見なすことができる。意識的な《dénuelement》が、我々の生の永続性というような、あらゆる《幻想》の拒否であるということを思い起せば、それはデカルトの方法的懐疑に相当するものであるということができよう。デカルトは方法的懐疑の結果、《コギト・エルゴ・スム》に到り、カミュは、不条理に至ったのである。ところでカミュは、『シジフの神話』に巻頭においては、不条理とは出発点でしかないと述べている。だがそれは、奇妙な出発点であるといえよう。というのも、それ自身の上に留まることを強いる出発点だからである。ここから、不条理な《反復》が生じるのである。実際、『シジフの神話』は反復の記述に満ちている。最終章におけるシジフが神々に罰として課された、頂上に着いた途端に転がりおちる岩を繰り返し運びつづけるという無益な労働自体が、このように不条理が絶対化されたことに由来すると考えることができる。このように絶対化された不条理は、カミュの論証に、反復以外にも幾つかの影響を与えずにはいない。その最たるものは、自殺を拒否する理由を与えたことである。いったん絶対的な要請として課されたからには、不条理は、《une conscience perpétuelle, toujours renouvelée, toujours tendue²⁶⁾》を要求する。なぜなら不条理の本質をなすのは意識そのものだからである。

Et qu'est-ce qui fait le fond de ce conflit, de cette fracture entre le monde et mon esprit, sinon la conscience que j'en ai?²⁷⁾

もし人間が彼の意識を放棄したなら、不条理を破壊してしまう。したがって、自殺することは許されないというわけである。

Vivre une expérience, un destin, c'est accepter pleinement. Or ne vivre pas ce destin, le sachant absurde, si on ne fait pas tout pour maintenir devant soi cet absurde mis à jour par la conscience. Nier l'un des termes de l'opposition dont il vit, c'est lui échapper. Avilir la révolte consciente, c'est éluder le problème.²⁸⁾

ここで、意識的反抗のテーマが現れる。反抗は、カミュによれば、あらゆる《幻想》の拒否であると同時に、避け得ない死を意識し続けることを意味している。この意味において、反抗は

《dénuement》の一形態であると言うことができよう。《dénuement》は、ここで、不条理な人間の生の在り方となるのである。

カミュは、次いで、不条理から不条理な自由の観念を引き出す。死を意識し続けることは、不条理な人間に、《il n'y a pas de lendemain.》ということを教える。そして、この認識自体が、*Noces* の中で、裸の状態が肉体的な自由を意味したように²⁹⁾、未来をあてにするというあらゆる幻想から彼を解放し、行動の自由を返すというのである。カミュは、ここでもやはり、強いられた《dénuement》から、意志的な《dénuement》へと移行しているといえよう。

論証の最後に、カミュは、量の倫理へとたどりつく。未来への無関心は、あらゆる価値を等価値とする。しかしながら、カミュにとっては、《Que tout soit privilégié revient à dire que tout est équivalent.》³⁰⁾なのであり、この逆もまた彼にとっては真であるということは、明らかである。彼はこの倫理を、時間に対してあてはめる。つまり、《あらゆる瞬間が、等価値であるということは、あらゆる瞬間が、特権的であるということに帰着する》というわけである。この倫理は、不条理な人間にとって、好都合だということができる。なぜなら、もしあらゆる瞬間が特権的なら、それを汲みつくすためには、意識は眠ってはならず、そのことは、不条理の要請に一致するからである。そこから、カミュは、現在への忠実を、不条理に対する首尾一貫した態度のひとつとであると結論するのである。

ここにいたって、カミュの方法が理解される。彼は、意識的な《dénuement》を、極限にまで、推し進めようとするのである。だがそれは、《幻想》によって隠されてはいるけれど、確実なある真実、すなわち不条理を出現させるためである。そしてその真実が、今度はそれ自身不条理な人間の生のあり方を規定するのである。ここに、カミュ自身が『シジフの神話』のなかで批判している、シュストフのやり方との類似をみることができる。

Le [l'absurde] constater, c'est l'accepter et tout l'effort logique de sa pensée [de Chestov] est de le mettre à jour pour faire jaillir du même coup l'espoir immense qu'il entraîne.³¹⁾

さらにカミュは、やはりシュストフと同じように、不条理自体の中に見る奇妙な幸福を見出さざるをえない。

On ne découvre pas l'absurde sans être tenté décrire quelque manuel du bonheur. 《Eh! quoi, par des voies si étroites...?》 Mais il n'y a qu'un monde. Le bonheur et l'absurde sont inséparables. L'erreur serait de dire que le bonheur naît de la découverte absurde. Il arrive aussi bien que le sentiment de l'absurdité naisse du bonheur.³²⁾

だが一方では、キルケゴールに関して、不条理がともなう苦痛を強調している。

Il refuse les consolations, la morale, les principes de tout repos. Cette épine, qu'il se sent au cœur, il n'a garde d'en assoupir la douleur.³³⁾

これは、一種の矛盾ではないだろうか。この幸福について、Pierre Nguyen-Van-Huy は、ニヒリスティックで想像的なものでしかないとして批判している³⁴⁾。

Certes, le révolté nihiliste peut éprouver une certaine joie orgueilleuse dans l'image de Satan, [...] Mais cette joie satanique est trompeuse : Satan n'est jamais condamné à la joie, mais à la souffrance. D'ailleurs cette force satanique de refus et de défi dépasse démesurément la force humaine. [...] C'est peut-être pour cela que l'auteur [Camus] a voulu nous montrer le champion de la révolte négative dans un personnage mythique et non dans un personnage humain. Quoi qu'il en dise, il ne peut cependant pas nous cacher l'amertume de son héros. [...] Comment peut-on être heureux dans l'enfer et conscient de la propre inutilité de ses efforts pour en sortir? Le bonheur de Sisyphe n'est donc qu'un bonheur imaginaire comme l'auteur nous l'a dit.

確かに、『シジフの神話』に不条理の英雄たちの神格化を見出すことや、シジフの幸福を想像的なものとみなすことは、誤りとはいえない。しかし、Pierre Nguyen-Van-Huy は、カミュが不条理に与えた変化を無視してしまっている。カミュは、不条理を生への忠実さへと変えてしまっているのである。それに Pierre Nguyen-Van-Huy は、シジフの幸福を、あまりにも一般的な見方でのみ、判断しているように思われる。だが、とりわけ文学の領域においては、個人的な真実もまた存在する。そのような真実をも、一般的な見方でのみ判断するのは、危険だと思われる。実は、『シジフの神話』は、その極限にいたろうとする情熱や、不条理な人間の神格化からみても、純粹に哲学的エッセーであるというよりも、むしろ、かなり個人的なエッセーであると考えたほうがよい³⁵⁾。この点で、『Le Désert』の最後の部分は、示唆に富んでいる。

On comprend rarement que ce n'est jamais par désespoir qu'un homme abandonne ce qui faisait sa vie. Les coups de tête et les désespoirs mènent vers d'autres vies et marquent seulement un attachement frémissant aux leçons de la terre. Mais il peut arriver qu'à *un certain degré de lucidité*, un homme se sente le cœur fermé et, sans révolte ni revendication, tourne le dos à ce qu'il prenait jusqu'ici pour sa vie, je veux dire son

agitation. [...] *à une certaine pointe de la conscience*, on finit par admettre ce que nous nous efforçons tous de ne pas comprendre, selon notre vocation. On sent bien qu'il s'agit ici d'entreprendre *la géographie d'un certain désert*. Mais ce désert singulier n'est sensible qu'à ceux capables d'y vivre sans jamais tromper leur soif. C'est alors, et alors seulement, qu'il se peuple des eaux vives du bonheur.³⁶⁾

《à un degré de lucidité...》《à une certaine pointe de la conscience...》といった表現は、カミュの、意識の極限を目指そうとする態度を示している。また、《géographie》という語も、『シジフの神話』以前に、カミュの方法的意志を既に表していると言えよう。だが、最も重要なのは、最後の部分での《幸福》の出現である。この《幸福》と『シジフの神話』の最終章におけるシジフの《幸福》との関係は、以下で述べるように、表面的なものではない。まず《ce que nous nous efforçons tous de ne pas comprendre, selon notre vocation》という部分が、意識の極限に現れるということに注意すべきだろう。これは、不条理がやはり論理的思考の極限に現れてくるといふことと、まさに符合する。そしてカミュは、そのような意識の極限を《砂漠》と呼ぶのだが、しかし、それは特権的な人々によってしか発見されないと主張するのである。なぜなら、その《砂漠》で生きられるひとにしか、《砂漠》は感じられないからである。これもまた、不条理の英雄が神格化されることと符合しているといっていよう。だが、もし、ある人間が、そこで生きることができたならば、《砂漠》自体が姿を変えるのである。このこともまた『シジフの神話』の最後の部分と、見事に照応しているといえる。

Cet univers désormais sans maître ne lui paraît ni stérile ni futile. *Chacun des grains de cette pierre, chaque éclat miéral de cette montagne pleine de nuit, à lui seul, forme un monde.*³⁷⁾

しかし、こういった《幸福》のいったいどこに論理があるのだろうか。実際、ほとんど論理は存在しない。しかしながら、個的な真実は存在しているといえよう。では、いったいどこから、このような《幸福》の啓示は、由来するのだろうか。おそらく『裏と表』のなかで、カミュと彼の母親がふたりきりだった夜の経験か³⁸⁾、あるいは、ブランショが指摘しているように³⁹⁾、彼らの関係自体にまでさかのぼることができるだろう。しかし、やはり *Noces* のなかに、特に《*Noces à Tipasa*》のなかに、この《幸福》の由来を見出すことができる。

《*Noces à Tipasa*》において、カミュは、繰り返し肉体的な歓びについて語っており、肉体的な歓びは、それだけで人間の生を支えるのに充分であると断言している⁴⁰⁾。

J'avais au cœur une joie étrange, celle-là même qui naît d'une conscience tranquille. Il y a un sentiment que connaissent les acteurs lorsqu'ils ont conscience d'avoir bien rempli leur rôle, c'est-à-dire, au sens le plus précis, d'avoir fait coïncider leurs gestes et ceux du personnage idéal qu'ils incarnent, d'être entrés en quelque sorte dans un dessin fait à l'avance et qu'ils ont d'un coup fait vivre et battre avec leur propre cœur. C'était précisément cela que je ressentais [...] ⁴¹⁾

しかし、ここで語り手が感じている歓びは、肉体的であると同時に、《métaphysique》なものである。なぜならその歓びは、《l'accomplissement ému d'une condition qui, en certaines circonstances, nous fait un devoir d'être heureux⁴²⁾》であり、また、カミュがここでは限定していない条件が《la condition d'homme》ということができるからである。

Tout à l'heure, quand je me jeterai dans les absinthes pour me faire entrer leur parfum dans le corps, j'aurai conscience, contre tous les préjugés, d'accomplir une vérité qui est celle du soleil, et sera aussi celle de ma mort. Dans un sens, c'est bien ma vie que je joue ici, une vie à goût de pierre chaude, pleine des soupirs de la mer et des cigales qui commencent à chanter maintenant. [...] J'aime cette vie avec abandon et veux en parler avec liberté : elle me donne l'orgueil de *ma condition d'homme*.⁴³⁾

《[...] J'aurai conscience, contre tous les préjugés, d'accomplir une vérité [...]》や《C'est à conquérir cela qu'il me faut appliquer ma force et mes ressources⁴⁴⁾》や《Je ne revêts aucun masque : il me suffit d'apprendre patiemment la difficile science de vivre [...] ⁴⁵⁾》などの表現はすべて、《dénuelement》の末に、《la condition d'homme》を認識した《幸福》なシジフを、すでに表しているということができる。このようにカミュにおいては、《幸福》とは、決して単純な歓びではなく、《difficile science》なのであり、《苦行》にさえ変りうるものなのである。

A portée de ma main, au jardin Boboli, pendaient d'énormes Kakis dorés dont la chair éclatée laissait passer un sirop épais. De cette colline légère à ces fruits juteux, de la fraternité secrète qui m'accordait au monde à la faim qui me poussait vers la chair orangée au-dessus de ma main, je saisisais le balancement qui mène certains hommes de l'ascèse à la jouissance et du dépouillement à la profusion dans la volupté⁴⁶⁾

明らかにこれと同じ理由で、カミュは、『シジフの神話』で、ドン・ジュアンに関して、歓びと苦

行を同一視している。

[...] cela [récit de sa vie qui le fait s'ensevelir, pour terminer, dans un couvent] figure plutôt le logique aboutissement d'une vie tout entièrement pénétrée d'absurde, le farouche dénuement d'une existence tourné vers des joies sans lendemain. La jouissance s'achève ici en ascèse. Il faut comprendre qu'elles peuvent être comme les deux visages d'un même dénuement.⁴⁷⁾

ここにいたって、*Noces* の重要性を再認識できる。*Noces* において、カミュは、すでに彼の真実を掴んでいる。この点からみると、『シジフの神話』は、彼の個人的な真実の実現と考えられる。しかし『シジフの神話』は、『不条理』という言葉で、まだ正確には限定されていなかった考えを明確にしたのである。事実、*Noces* においては《une certaine pointe...》などの非限定的な表現や、比喩的な表現が多く、カミュが、その時期にはまだ、自らの考えを正確に表現することにいくらかの困難を感じていたことを示している。また、『シジフの神話』は、彼の《方法序説》にあたるものでもある。彼のあらゆる幻想の拒否は、デカルトの方法的懐疑に比較しうるし、また、あらゆる価値の等価性は、《table rase》と見なすことができよう。

しかし、シジフの幸福は、その哲学的な枠をはみ出してしまふ。そして、そのこと自体が、『シジフの神話』の二重の性格を決定しているのである。その二重の性格とは、すなわち、《la géographie d'un certain désert》と《quelque manuel du bonheur》のふたつなのである。

終りに

カミュにとって《dénuelement》とは、彼が生れ育った環境や、彼を青年時代に襲った病により強いられたものであったにちがいない。しかし、彼は、文学活動の開始とともに、《dénuelement》自体に積極的な意味を与えるようになる。そして、彼の《幸福》の源泉さえも、そこに見出すことができるのである。こうした点からみて、『シジフの神話』は、カミュの《dénuelement》への執着の結果といえることができる⁴⁸⁾。

注

- 1) 本論文で使用したカミュのテキストは、次の二つであるが、特に指定しない限り、引用は、すべて前者からのものとする。また、引用中における下線はすべて筆者によるものである。

Essais, 《Bibliothèque de la Pléiade》 Gallimard, 1965.

Téâtre, Récits, Nouvelles, 《Bibliothèque de la Pléiade》, 1962.

Œuvres complètes d'Albert Camus VII et IX, Le Club de l'Honnête Homme, 1983.

2) 《Entre Oui et Non》 p. 27.

3) 《L'Ironie》 p. 20.

4) *Ibid.*, p. 18.

5) 《幸福な死》が、カミュの実質的な処女小説の題名であることは、周知の事実であろう。『幸福な死』は、二部構成をとっているが、各章の題名は、《自然な死》、《意識的な死》となっている。後者の方が、《幸福な死》に対応することは、明らかである。次に引用するのは、メルソーの死の場面であるが、《意識的な死》と《幸福な死》とが、対応していることを、よく示している。

Et dans l'immobilité même de Zagreus en face de la mort, il [Mersault] retrouvait l'image secrète et dure de sa propre vie. La figure l'y aidait et avec elle cette certitude exaltante qu'il avait de maintenir sa conscience jusqu'au bout et de mourir les yeux ouverts ce jour-là et des larmes y roulaient. Mais c'était la dernière faiblesse d'un homme qui n'avait pas eu de part à sa vie.

Patrice [Mersault] ne craignait pas cette faiblesse [...] Car lui avait parfait l'unique devoir de l'homme qui est seulement heureux. (*La Mort heureuse*, in *Œuvres complètes d'Albert Camus VII*, p. 364)

6) 《Le Vent à Djémila》 p. 63.

7) *Ibid.*, p. 64.

8) *Ibid.*, p. 64.

9) *Ibid.*, p. 65.

10) 《Le Désert》 p. 85.

11) *Ibid.*, p. 87.

12) Cf. 《Préface à l'édition américaine du théâtre》: 《Caligula est l'histoire d'un suicide supérieur.》
Téâtre, Récits, Nouvelles, 《Bibliothèque de la Pléiade》 p. 1730.

13) 『シジフの神話』は、次の四つの章で、構成されている。《Un Raisonnement absurde》、《L'Homme absurde》、《La Création absurde》、《Le Mythe de Sisyphe》

14) *Le Mythe de Sisyphe*, p. 101.

15) *Ibid.*, pp. 102-103.

16) *Ibid.*, pp. 106-107.

17) *Ibid.*, p. 107.

18) *Ibid.*, pp. 108-109.

19) *Ibid.*, p. 109.

20) *Ibid.*, pp. 109~110 におけるアリストテレスの例を参照。

21) *Ibid.*, p. 110.

22) *Ibid.*, p. 111.

23) 《L'Été à Alger》 p. 75.

24) Autrefois, en un temps où Camus refusait de parier sur l'esprit, le moi et le monde s'équilibraient pour lui dans un parfait accord. Tant que le moi dépendait, pour sa définition, du monde phénoménal, on pouvait parler de fusion, d'harmonie, de bonheur. De l'unité plotinienne il avait trouvé un équivalent charnel et terrestre [...] Mais que l'on s'efforce de définir ce moi et ce monde par l'intérieur, et tous les rapports s'écroulent; l'esprit ne se saisit pas plus qu'il ne saisit le monde. Passer de la chair à l'esprit, c'est passer de l'unité au désordre. (A. J. Clayton,

Etapes d'un itinéraire spirituel, Albert Camus de 1937 à 1944, Minard, Lettres Modernes, 1971.
《Archives des Lettres Modernes n° 122》, p. 29.

25) *Le Mythe de Sisyphe*, p. 113.

26) Il importe surtout de souligner la transformation subtile que Camus opère en ces pages à l'intérieur même de l'absurde. Car il altère radicalement sa définition originelle. Etat existentiel auparavant, l'absurde se transforme ici en devoir. (A. J. Clayton の前掲書 p. 34.)

27) *Le Mythe de Sisyphe*, p. 136.

28) *Ibid.*, p. 138.

29) Etre nu garde toujours un sens de liberté physique...(《Le Désert》 p. 84)

30) *Le Mythe de Sisyphe*, p. 131.

31) *Ibid.*, p. 123.

32) *Ibid.*, p. 197.

33) *Ibid.*, p. 116.

34) *La Métaphysique du bonheur chez Albert Camus*, Neuchâtel, la Baconnière, 1962, p. 74.

35) Je [Camus] travaille à mon essai sur l'Absurde. J'ai renoncé à en faire une thèse. Ce sera un travail personnel. (*Correspondance Albert Camus-Jean Grenier*, in *Œuvres complètes d'Albert Camus*, p. 191.)

36) 《Le Désert》 p. 88.

37) *Le Mythe de Sisyphe*, p. 198.

38) Ce n'est que plus tard qu'il éprouva combien ils avaient été seuls en cette nuit. *Seuls contre tous. Les «autres» dormaient, à l'heure où tous deux respiraient la fièvre.* Dans cette vieille maison, tout semblait creux alors. Les tramways de minuit drainaient en s'éloignant toute l'espérance qui nous vient des hommes, toutes les certitudes que nous donne le bruit des villes, Il ne restait plus qu'un grand jardin de silence où croissaient parfois les gémissements apeurés de la malade. (《Entre Oui et Non》 p. 27)

カミュは、ここで、日常的な世界から切り離された世界を、描いているのだが、そのような世界であっても、彼と、かれの母親との間には、《un accord》が存在していると思われる。それは、下線部のような表現に現れている。

39) M. Blanchot, 《Le détour vers la simplicité》 (Fragments), in *Les critiques de notre temps et Camus*, pp. 104~110, とりわけ, pp. 109~110 を参照。

40) プレイヤッド版のヴァリエーションを参照すると、カミュは、次のような比較を行っている。

C'est précisément cela [le sentiment que connaissent les acteurs] que je sentais : j'avais bien joué mon rôle. L'acteur qui aime son métier se suffit de cette certitude et les critiques les plus élogieuses ne lui apportent rien de plus. (p. 1348)

もし、この部分において、《mon destin》を《mon rôle》に、《l'homme》を《l'acteur》に、《sa vie》を《son métier》にそれぞれ、置き換えたならば、肉体的な喜びは、人間の生を導くことができる価値でありえるということになる。さらに、この価値は、カミュにとっては、人生に価値を与えるほかのどんな価値のシステムにも依存しない、絶対的なものであるということになる。

41) 《Noces à Tipasa》 p. 60.

42) *Ibid.*, p. 60.

43) *Ibid.*, p. 58.

44) *Ibid.*, p. 58.

45) *Ibid.*, p. 58.

46) 《Le Désert》 p. 88.

47) *Le Mythe de Sisyphe*, p. 157.

48) カミュの晩年においても《dénuelement》のテーマは存在するが、その性格は変ってしまう。晩年においては《dénuelement》は、回顧的な形を取るのである。つまり、源泉としての貧困に回帰することによって、自己を回復しようとする動きとして現れるのである。それこそが『裏と表』の再版への序文の持つ意味に他ならない。

Le plus grand des luxes n'a jamais cessé de coïncider pour moi avec un certain dénuelement.
J'aime la maison nue des Arabes ou des Espagnols. (p. 7)